

ぶら多摩クラブ・ウォーキング 104 2025 新河岸川②
(すこし番外編) 志木市



引又宿と新河岸川舟運

9月20日(土) 東武東上線志木駅改札前 10時集合

コース： 志木駅⇒上の水車跡⇒東明寺の庚申供養地蔵⇒旧西川家くぐり門⇒下の水車跡⇒朝日屋原薬局⇒敷島神社・田子山富士塚⇒引又河岸跡⇒いろは樋の大榎⇒旧村山快哉堂⇒(バス:志木市役所前から貝塚公園入口)⇒水子貝塚⇒みずほ台駅
約10km

昼食は いろは親水公園 あたりで弁当

申込期限：9月17日(水)





富士見市

水子貝塚

バス：志木市役所前から貝塚公園入口

ゴール：みずほ台駅

I はじめに

2025 年 3 月に新河岸川の舟運と題して福岡河岸を中心に巡りました。今回はその続きで引又宿を訪ねます。引又宿は現在の志木市の一部に相当し、江戸時代には、新河岸川と柳瀬川の合流地点に引又河岸がありました。今回は野火止用水の志木市の部分、引又河岸の周辺、国指定重要民俗文化財となっている田子山富士塚を訪ねます。次にバスで縄文海進時代には海際であった水子貝塚に向かいます。

前回の続きとしては新河岸川上流からくだるべきですが、見どころが引又宿に集中しているので先に訪ね、時間的な余裕があったら上流方向の水子貝塚に向かう方針で行きたいと思います。

本来は第 2 土曜日の 13 日に予定していましたが、田子山富士塚は同日が仏滅であるため登山が出来ないが、大安の 20 日には可能なので延期しました。暑さも少し和らいでいることも期待して。

II 見どころ

1. 野火止用水といろは樋

昭和 40 年まで本町 1 から 2 丁目の市場通りの道路中央を野火止用水が流れていました。この用水は智恵伊豆といわれた川越城主 松平伊豆守信綱（まつだいらいずのかみ のぶつな）が自領である野火止台地の灌漑のため開削した用水のため「伊豆殿堀」とも呼ばれていました。信綱は川越城主となって 14 年目の承応 2 年（1653）に領内の農民 54 軒を招致して野火止用水の開削に踏み切りました。

ところが、このあたりは高台のため明治になってからでも井戸を掘るのに 24m も掘り下げなければならぬほどで、ましてや灌漑用水などには縁のないところでした。そのころ江戸市民に飲料水を送るため、玉川上水の工事は始まっていました。信綱はこの水を小川村（現 東京都小平市）から分水することに着目し、この難工事を家臣の安松金右衛門に命じ、金右衛門は信綱の期待に応え、承応 4 年（1655）3 月、わずか 40 日の短期間で完成させました。

野火止用水の開通によって、取り入れ口の小川村から新座郡引又村（現志木市）までの約 24km の沿岸は開発が進み、農業生産力が大いに向上しました。野火止用水はまた、灌漑用水としてだけではなく、飲料水としても長い間利用されました。用水は開通後しばらくは新河岸川に流れ込んでいましたが、対岸の宗岡地区の灌漑用水にも利用しようと、寛文 2 年（1662）

に宗岡の地頭岡部左兵衛が家臣の白井武左衛門に命じ巨大な架け樋を造らせました。用水はこの樋で新河岸川を渡し、宗岡地区の田畑をも潤すことになりました。樋は船の通行を妨げないようにするため、川面から約4から5mも高い所に架けられ、48個の木樋をつなぎ合わせてあることから、「いろは樋」と名付けられました。この樋は全長230mにも及び、江戸時代には百間樋の名で地域住民に親しまれたといわれています。（志木市ウェブサイトより）

今回は歩くコースの途中に、現在は暗渠となった「野火止用水」、「上の水車跡」、「下の水車跡」、「いろは樋の大榎」などの痕跡が残っています。



2. 東明寺の庚申供養地蔵

東明寺は本町1丁目、以前の志木市字中野の地内にあり、「阿弥陀山安養院東明寺」と号し、新義真言宗智山派の寺院で、無住のまま、地王山地蔵院宝幢寺の所有になっています。ご本尊は阿弥陀如来です。この寺の境内、本堂右に、志木市指定民俗文化財「東明寺の庚申供養地蔵」があります。寛文7年（1667）2月造立の庚申信仰に基づく庚申と地蔵が習合する石造仏で、光背に「庚申供養也 武州新倉郡墓俣村」と刻まれています。この庚申供養地蔵の脇に立つ市教育委員会の説明にあるとおり、この庚申供養地蔵は「墓俣」の字が使われている市内唯一の石造物であり、史料的高価値の高いものです。新河岸川に柳瀬川が注ぎ込む引又地区は、二つの川が合流する地点付近の蛇行が顕著で、まるでヒキガエルが這いつくばっているように見えたのでヒキマタの地名になり、引又村（現在の本町地区付近）に墓俣の字が使われたともいわれています。江戸時代、一般的には「引又」を用い、「引俣」「引股」も使われていたようですが、公用では「墓俣」「墓股」が使われていたようです。天正4年（1576）新座郡舘村から三上弾左衛門が息子二人とともに新河岸川と柳瀬川の合流地点へ新田開発に入って

以後、引又村は農業の村から商業の町へと変わっていき、さらにその後、脇往還奥州街道の宿場、新河岸川舟運の河岸場、そして引又市の市場として大いに発展しました。（志木市歴史散歩より引用）

3. 旧西川家潜り門

志木市の商家西川家の中庭に建てられていた棟門。扉や柱に武州一揆の刀傷がみられ、慶応2年（1866）頃の建築と推定されています。（志木市観光協会ウェブサイトより）



4. 朝日屋原薬局

明治20年に創業された薬局で、母屋を含む全7棟が国登録有形文化財に指定されています。明治から昭和初期の建物構成がよく残されています（非公開）。（志木市観光協会ウェブサイトより）



5. 田子山富士塚（敷島神社境内）

明治5年（1872）6月に築造された富士塚で、敷島神社境内にあります。古墳といわれてきた田子山塚」の上に三十三尺（約10m）の土を盛り、2年8カ月の歳月をかけて完成したといわれています。築造の発起人は後に富士講の先達となった高須庄吉で、現在、山の正面右側にある浅間下社に祀られている暦応3年（1340）の紀年のある十瀧房承海の逆修板碑を発見したことが築造のきっかけと伝えられています。高さは約8.7m、直径約30mの丸みのある方形をした富士塚で、現存する富士塚では最大級のものです。富士信仰の主要な石造物や御胎内、つづら折りの登山道、合目石、塚表面の黒ボク石など、富士塚の典型的な要素を備え、塚の形容も優美です。頂上には木花開



えられています。高さは約8.7m、直径約30mの丸みのある方形をした富士塚で、現存する富士塚では最大級のものです。富士信仰の主要な石造物や御胎内、つづら折りの登山道、合目石、塚表面の黒ボク石など、富士塚の典型的な要素を備え、塚の形容も優美です。頂上には木花開

耶姫命が祀られた奥宮があります。特に石造物の数と種類、細工は他の富士塚と比較しても並はずれて優れており、当時の引又河岸や富士信仰を知る上でも欠かすことのできない貴重な文化財です。また、富士塚が江戸から周辺地域に伝播する過程や富士講の地域的な活動を考える上でも貴重です。国指定の富士塚としては5基目で、県内では、「木曽呂の富士塚」に次いで、2基目の指定です。（志木市ウェブサイトより）

6. 引又河岸跡

数ある新河岸川の河岸場の中でも特に引又河岸（明治7年以降は志木河岸）は後背地の広さと集散する物資の量の点で群を抜いていました。それは、引又の地が経済、交通上の要衝の地でもあったためでした。



7. 旧村山快哉堂

明治10年(1877)11月に建築された木造2階建て土蔵造りの店蔵で、平成7年(1995)に解体後、平成13年(2001)にいろは親水公園村山快哉堂ひろばに移築復元したもの。店蔵が座売り形式の商形態を残す点、一階中央部分の吹き抜け、鉢巻の2段構成、ムシコ窓とその枠回りなど川越の店蔵とは異なる特有の意匠構成が見られ、貴重な有形文化財(建造物)です。（志木市ウェブサイトより）



8. 水子貝塚／水子貝塚資料館

新河岸川右岸の台地縁辺部に位置する水子貝塚は、黒浜貝塚とともに縄文時代前期（約5500～6500年前）を代表する貝塚で、国の史跡に指定されています。60か所の地点貝塚が輪のように連なっており、当時の環状集落の形態がよく残っています。貝塚の貝は、汽水域に棲息するヤマトシジミがほとんどであるが、ハマグリやカキなど海産貝類も出土している。現在は、約4haが「縄文ふれあい広場 水子貝塚公園」として整備され、復元された5棟の竪穴住居や、ガイダンス施設として水子貝塚展示館があるほか、展望台から貝塚の分布を眺めるこ

ともできます。公園に隣接する水子貝塚資料館では、約3万年前の旧石器時代の石器群や、「ムササビ土器」と称される県指定文化財の羽沢遺跡出土縄文土器など、市内の各遺跡から出土した考古資料を見ることができます。（JR おでかけネットより）

Ⅲ 参考

1. 新河岸川運行と引又河岸

荒川の支流の新河岸川は古くは内川と呼ばれていました。ところが寛永15年（1638）1月に川越に大火があり、日本三大東照宮の一つである仙波東照宮が焼失すると、これを復旧するため江戸城紅葉山御殿を分解して移築することになり、その時、当時古市場（現川越市）ないしその少し上流あたりまで水運がおこなわれていた内川が着目され、現在の新河岸の地点まで遊水池をつないだり、掘削したりして新水路と河岸場を作りました。この河岸場は新しく作られた河岸場のため新河岸と呼ばれ、新河岸までの舟運が盛んになるといつしか川の名前も新河岸川と呼ばれるようになりました。

武蔵野台地の北東縁を流れる水量豊富な全長約30里（約120km）にも及ぶこの川の沿岸には、数多くの河岸場が設けられました。その数は、河の口（現和光市）までに23カ所、荒川に合流してから浅草花川戸（現東京都台東区）までの荒川筋に16カ所余りに及びました。数ある河岸場の中でも特に引又河岸（明治7年以降は志木河岸）は後背地の広さと集散する物資の量の点で群を抜いていました。それは、引又の地が経済、交通上の要衝の地でもあったためでした。

廻漕問屋も寛永年間（1624から44）には三上家（下の問屋）が、明暦2年（1656・一説には元禄年間）には井下田家（上の問屋）がそれぞれ創業しています。高須家は、明治13から14年頃に三上家が廃業した後、井下田家と共に引又河岸で廻漕業務にあたるようになりました。隆盛を極めた新河岸川舟運も大正10年からの河川改修により水位が低下し、舟の航行が著しく困難となったため、昭和6年に県から通船停止令が出され、ここに300年以上にもわたる物資輸送の役割を終えることになったのです。（志木市ウェブサイトより）

2. 引又宿の河童伝説～『和尚に助けられた河童』

むかし引又川（現在の新河岸川、柳瀬川のいずれであるか不明）には河童が住んでいて、人や馬を川に引っぱりこむことがよくあった。ある時、宝幢寺の小僧が、寺の馬を川に連れていき、水浴びをさせていた。ところが、急に馬は何かに驚いたらしく、あわてて寺のほうへと走り去って行ってしまった。小僧はなにがなんだかわからなかったが、責任上、ともかくあとを追いかけて、寺に向かってかけていった。小僧が寺に着いてみると、案の定、馬は厩に戻っていた。しかし、どうも馬のようすがふだんと違っておかしい。だいが、興奮している感じなのだ。ところで、小僧は、厩に着いた瞬間は、中が暗くてよく見えなかったが、暗さに目が慣れてくると、厩の片隅に、何か異様なものがあるのに気がついた。よくよく見ると、童子のようなかっこうをした動物のようだ。しかも、馬にだいが踏みつけられたとみえ、かなり弱っている。小僧は河童をまだ見たことはなかったが、とっさに、引又川で人や馬にしょっちゅう悪事を働いている河童は、こいつに違いないとひらめき、厩から引きずり出した。この騒ぎを聞きつけて、寺の近所の人が大勢やって来たが、ふだん人馬に害を与えている河童だと知ると、口々に、「焼き殺してしまえ」、といいながら、薪を持って、小僧と河童のまわりをとり囲んだ。そして、寺の境内の大いちょうの枝から河童をつるして、その下には薪をうず高く積んで、火をつけようとした。焼死刑執行寸前の危機に陥った河童は、死にもの狂いになって、手をあわせ、泣きながら周囲の人たちに許しを求めた。この時、だいが前からの騒ぎで庫裏（寺の台どころ）から出て来て、群集の中に混じってようすを見守っていた宝幢寺の和尚は、これを見て河童がかわいそうになり、いきり立つまわりの人たちに命乞いをして助けてやった。いちょうの枝からつるされていた縄をほどいてやったときに、「これからは、絶対に人や馬をねらってはいけないよ」と、静かにいって聞かせてやると、畜生ながらその言葉が身にしみてわかったらしく、地にひれ伏して、ただただ泣くばかりだった。その姿を見て人びとも哀れに思い、川の縁まで連れて行って離してやった。河童は寺から川まで泣き通しだったが、いざ川の中に戻ろうというとき、何度も何度も人びとに頭を下げて、お礼と詫びの気持を表わした。その翌朝のこと、和尚がまだ寝ている間に、鮎が二ひきその枕元に置いてあった。人びとは、きっと河童が和尚に命を助けてもらったお礼をしたのだらうと、うわさしあった。また、このことがあって以来、二度と人や馬が河童の被害を受けることはなかったといわれている。（埼玉県の話と伝説〈入間遍〉より）